

9 日常生活

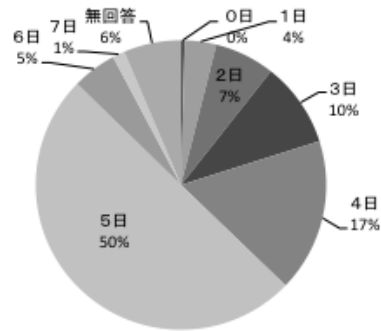
1. 大学に来る日数と出席率

1) 今学期は、大学にどの程度来ていますか。

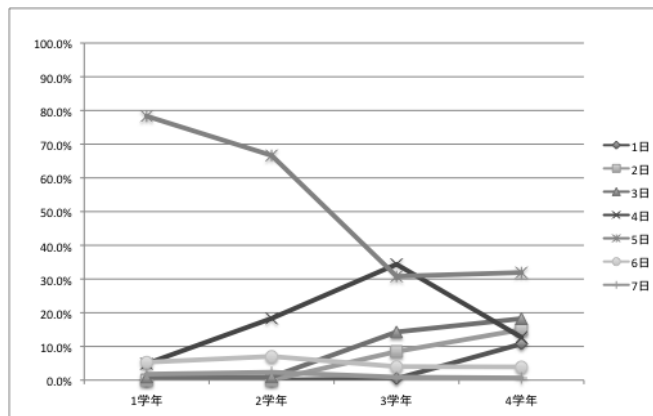
回答形式 学期中、大学に来ている日（週に何日か）

大学に来ている日は全学部生でみた場合、週に5日の週休2日が半数（50.1%）で圧倒的に大勢であった。ただし、学年により差異は明白で、初年次生は週5日が80%近くに達しているが、2年次には70%を割り、3、4年生では30%付近にまで落ちる。代わって週4日という回答が3年生にかけて上昇し、3年生では週4日という回答が5日という回答を上回って約35%になっている。4年生になると週2～4日という回答がそれぞれ10～20%と増すがそれでも割合としては週5日来ている学生が約1/3いる。

図表 9-1 学期中、大学に来ている日（週に何日か）(学部)

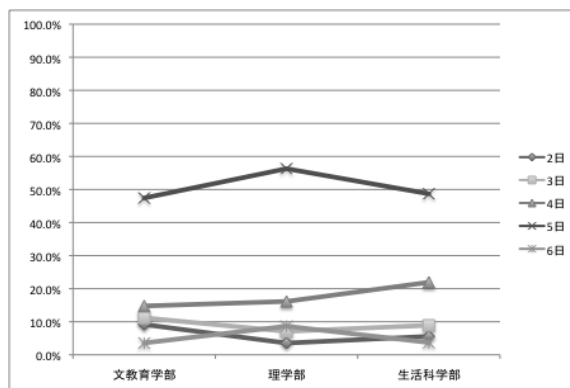


図表 9-2 学期中、大学に来ている日（選択率）(学年別)



東京大学の大学経営・政策研究センターが2007年に全国127大学、約5万人（48233人）の学部学生（1年～4年生ほぼ同割合）に実施した調査結果では人文・教育・理学・家政系での同設問への回答でやはり週5日が最も高く、その平均値はおおよそ56～58%であった。だから、本学のこの結果はとりたてて大学に来ている日において大学生一般よりも多いというわけではなく、平均的ないし若干少なめといってもよいかもしれない。

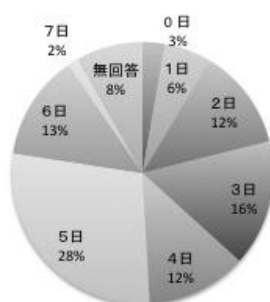
図表 9-3 学期中、大学に来ている日(選択率)(学部別)



この設問への回答で学部間には明白な相違はなかったが、理学部の学生が他学部の学生よりも全般的にはより多くの日数大学に来ている傾向は見出された。

大学院生についても割合としては週 5 日大学に来ている学生が最も多い (28.3%) がその大きさは学部生に比較してはるかに小さい。代わって週 1~3 日という割合がおおよそ 34%となっている。ちなみに学部生のその割合は 20%であった。

図表 9-4 学期中、大学に来ている日(週に何日か)(大学院)



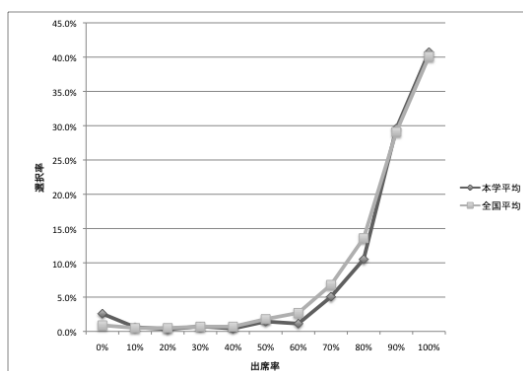
2)授業にはどれくらい出席していますか。

回答形式 授業への出席率 (何割程度か)

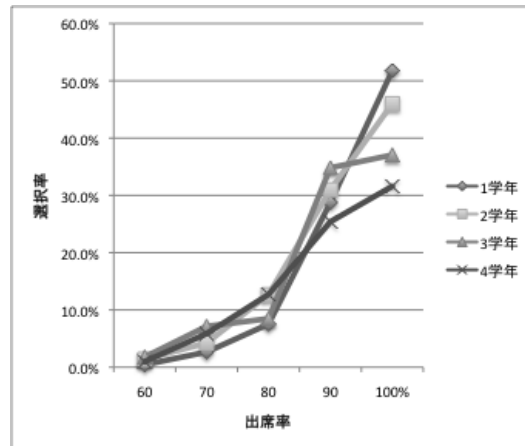
授業への出席率は 100%という回答が 40%あり、回答の 80%が出席率 80%以上という回答であった。これは意外なほど高く思えるが、これらの値は先の 5 万人全国調査でもほとんど同じである。むしろ傾向的には本学の全学平均データは全国平均値よりもわずかに下回る気配になっている。

学年別にみると、学年が上がるほど出席率は低下し、とくに 1 学年では 50%を超える無欠席とする回答が 4 学年では 30%程度となっていることがわかる。

図表 9-5 学部生の出席率の比較

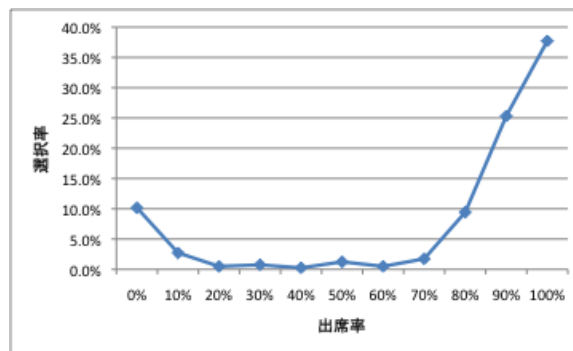


図表 9-6 学部生の出席率(学年別)



大学院生の場合は 100%出席が 38%、80%以上の出席という回答が 72%となり、学部生より一まわり減り、代わりに出席せずという回答が 10%となるが、それでも自覚上の出席率が高い。

図表 9-7 大学院生の出席率



2. 大学生活

1) 大学で過ごす時間のうち、次のようなことをどのくらいしていますか。

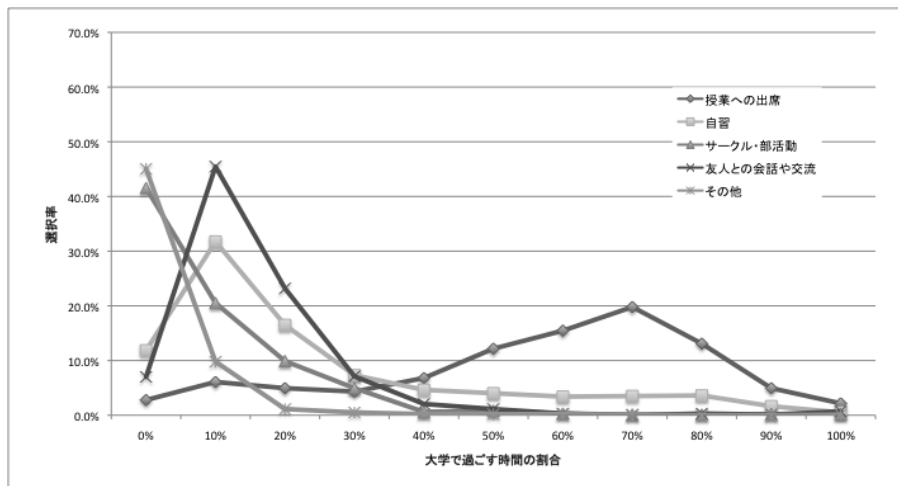
回答形式 合計が 10 割になるようにお答えください。なお授業やゼミなどの準備は「2. 図書館や研究室などでの自習」に含めてください。

1. 授業などへの出席
2. 図書館や研究室などでの自習
3. 大学構内でのサークル・部活動
4. 友人との会話や交流など
5. その他

学部生の場合、大学で過ごす時間の主体は授業への出席であることが明白である。全学平均でほぼ回答の半数は 6~8 割の時間を授業の出席に費やしている。グラフのピーク点を拾えば、キャンパスでの典型的な行動の割合がみえる。すなわち、7 割前後の時間を授業の出席に使い、1 割ずつを友人との会話や交流と自習に費やして残り 1 割がサークル活動やその他ということになる。

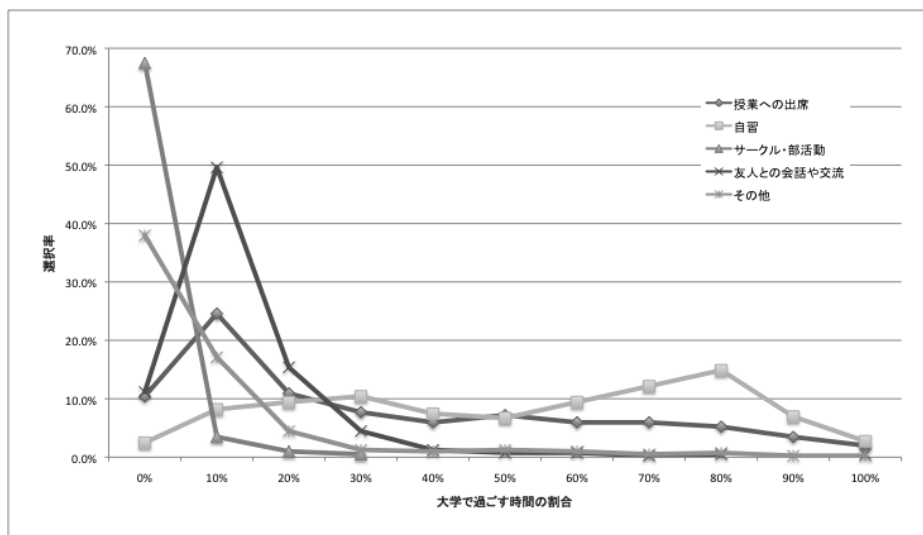
サークル活動に時間を使っていないとする回答がおおよそ 4 割 (41.5%) あったが、先の全国調査でも 1 週間の平均的な生活時間という質問の仕方、サークル・クラブ活動を 0 時間としている回答が 45%であったから、これは本学に特異なことではなく、現代大学生の一般的な傾向とみることができる。

図表 9-8 大学で過ごす時間の割合(学部生)



大学院生になると学部生と様子が異なり、授業への出席時間は10%前後がピークとなり、代わって研究室や図書館での自習がピーク80%前後で主体になっている。これはごく当然の結果といえよう。

図表 9-9 大学で過ごす時間の割合(大学院生)



2)あなたは次の項目について、これまでの大学生活のなかで、どのくらい力を入れてきましたか。

回答形式 それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

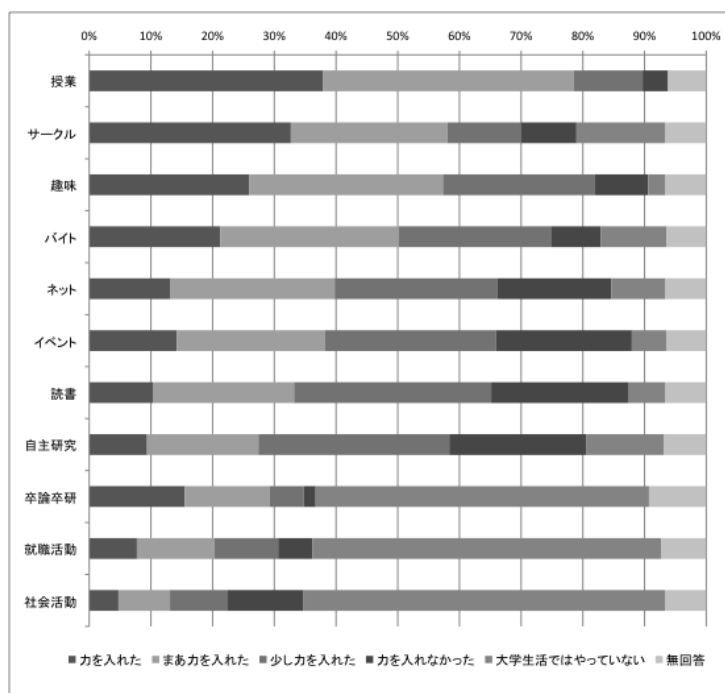
1. 大学の授業
2. サークルや部活動
3. 卒業論文や卒業研究
4. 大学の授業以外の自主的な勉強・研究
5. 学校行事やイベント
6. アルバイト
7. 社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）
8. 就職活動
9. 読書（マンガ、雑誌を除く）
10. インターネットを介した情報摂取やコミュニケーション
11. 趣味

選択肢 力を入れた まあ力を入れた 少し力を入れた 力を入れなかった 大学生活ではやっていない

大学生活で力を入れたことと、その入れ具合、比較的高かった事項から順に並べ直したのがつぎのグラフである。

学部生の場合は選択項目におおよそ3つのパターンが認められた。1つめは力の入れ具合が高かった4つの項目で、授業、サークル活動、趣味、バイトである。前の質問結果にみたように、サークル活動には関わっていない学生も相当程度いたわけで、そのことを反映して、ここでもはっきりと力を入れたという反応ではサークル活動が2番目になるが、少しでも力を入れたという意識があるところまでみれば、サークル活動への傾注は低下する。

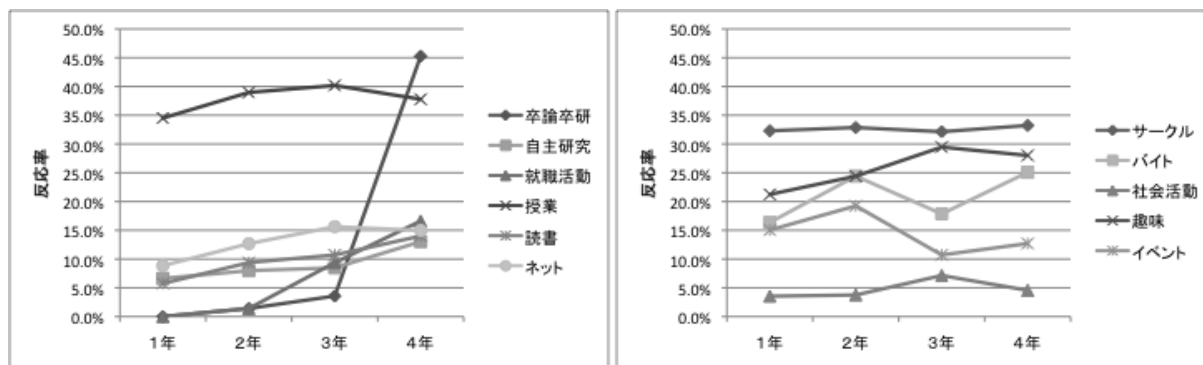
図表 9-10 大学で力を入れたこと(学部生)



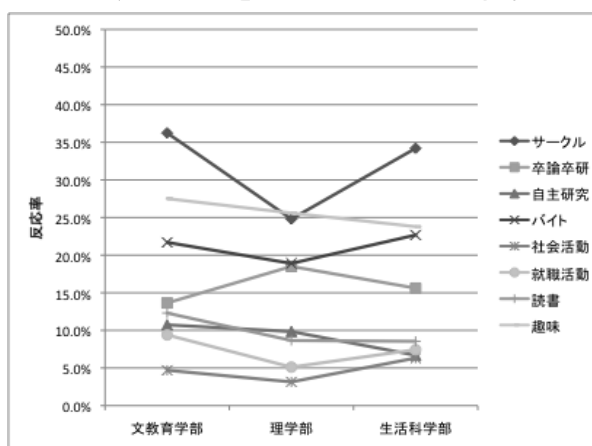
2つめのパターンは1つめのパターンよりも力の入れ具合が弱く、全学生の半分以上は力を入れた意識のある事項である。項目間にそれほど差異はないが傾注度の高い順にネット、イベント、読書、自主研究であった。ネットに読書が含まれつつある時代だが、二者を分けたこの設問上では今やあきらかに読書よりもネットへの傾注が高くなっていることが確認できる。学部学生の場合、大学の授業以外の自主的な勉強・研究への力の入れ具合が低い様子がうかがえる。これは授業への注力が強すぎ、またそれを誘導するような環境になっている可能性を示唆している。

3つめのパターンは力の入れ具合が他項よりも相対的に低かった項目である。そもそも大学生活ではおこなっていないという回答が5割を超えた事項で、卒論・卒研、就職活動、社会活動である。項目をみればすぐにわかるように、卒論・卒研と就職活動は1、2年次生にはほとんど無縁でその後に力を入れるものであるから、当然の結果である。確認のために別のグラフで学年別に各項目について「力を入れた」とした回答の様子をみた。項目数が多くグラフが重なって見づらいため2つに分けて表示した。

図表 9-11 力を入れたものの反応率(学年別)



図表 9-12 力を入れたものの反応率(学部別)



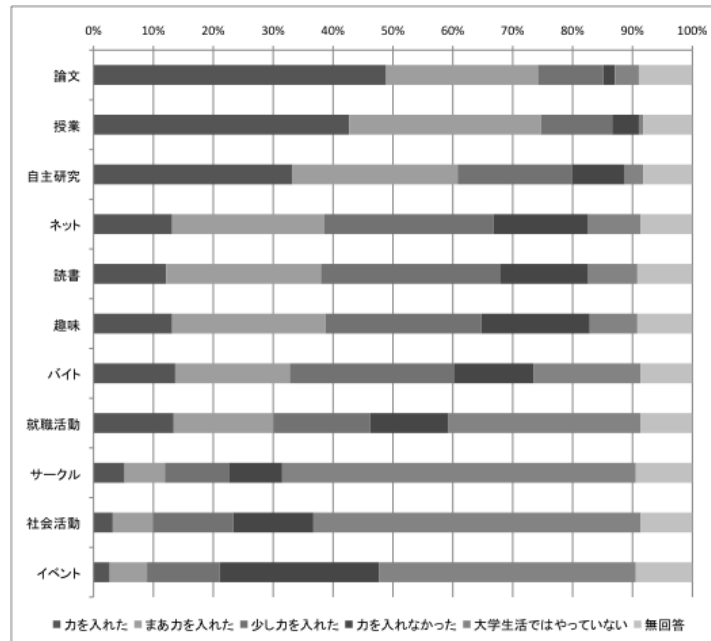
就職活動への力の入れ具合は意外にも穏やかな上昇に留まっているが、卒論・卒研への傾注はごく当然だが4学年で顕著に高まり、授業へのそれを上回ることが見て取れる。また、学年があがるにつれて、すこしずつネット、読書、自主研究への力の入れ具合が高まることもわかる。反対に1、2年次に比べて高学年で力の入れ具合が明確に低下するのは行事やイベントである。学部別で反応差異が大きめであった項目をあげておく。理学部において他学部より反応が低かった項目はサークル活動(かなり明確)、アルバイト、就職活動、反対に高かった項目には卒論卒研があった。文教育学部で他学部より高かった項目は趣味、自主研究、読書であった。生活科学部で他学部より高かった項目は社会活動であった。

学部生に対して院生の結果はあきらかに異なっており、それらしい結果となった。傾注度合いに3パターンを見出せることにはかわりはなかったが、ひとつめのパターン、すなわち力の入れ具合が明白に高いのは論文作成と授業、および自主研究であった。学部生のサークル活動と趣味に替わって論文作成と自主研究が入っているわけで、しかも論文作成と授業への力の入れ具合いはほぼ並んでいる。

1つめのパターンより傾注度が下回った項目はネット、読書、趣味、バイトであった。また、院生生活でそもそもおこなっていないという反応が最も多かった第3パターンの項目は就職活動、サークル、社会活動、イベントであった。

なお、全国調査にはこの設問と同等の設問はなかったため、それとの比較はできない。

図表 9-13 大学で力を入れたこと(大学院生)



3) 授業以外で週に何時間くらい勉強していますか

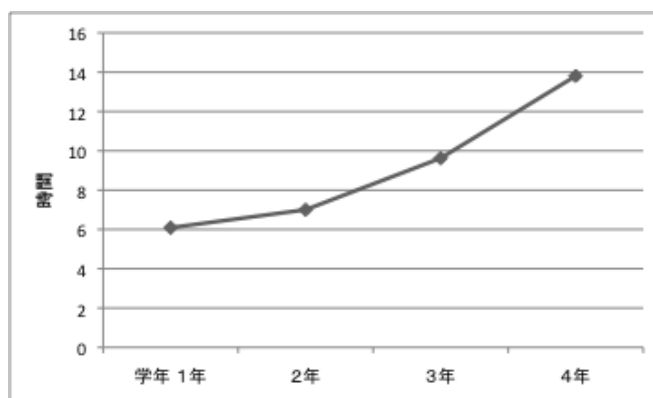
回答形式 (自宅、図書館、研究室など) 時間数記述

授業時間外学習の時間数を自由記述により、端的に尋ねた質問である。学部生に対してのみ提示した設問であったが、その全学平均値は 9.5 時間、最小値 0、最大値 80 で標準偏差は 9.8 であった。標準偏差内に最小値が入り、偏差レンジの 0~19.3 内にサンプルの 83.4%が入ることから、分布は正規分布を逸脱し、平均値よりも小さい値に偏った形状をなしていることもわかる。中央値は 6 時間であったから、値の大きい方に少数の極端値が存在していることがわかる。実際にみても、最大値は週 80 時間の学習とした回答であった。つぎに大きかったのは 70 時間で 1 サンプル、つぎが 50 時間で 3 サンプル、以降漸減し同一値複数サンプルが認められる。他方、最小値 0 時間のサンプル数は 18、つぎに小さかった 0.25 時間が 2 サンプル、0.5 時間が 15 サンプルという具合であった(あまりにも少ない時間数での回答が多いことから、一日あたりの時間数と勘違いした例があったことも推察される、実際、こうした生活時間数は週あたりで考えたり、見当をつけたりすることはあまりない。設問設計にあたっての今後の課題である)。

以上より、授業時間外学習の全学的な平均像は中央値も加味して週あたり 9 時間 30 分~6 時間程度とみることができる。

ところで、単位の実質化という観点からこの学習時間の妥当性をみしてみる。本学の生活科学部食物栄養学科を除く 2009 年度(4 年間在学)の全学平均取得単数数は 155.7 単位であった。1 年平均 39 単位である。とりあえずこれをすべて講義相当とみたとき、単位として求められている授業時間外学習の時間数は 39×30 時間で 1170 時間ということになる。授業期間は 1 年で 35 週だが、この設問の聞き方は漠然と週におこなう学習時間であったから、1 年間 52 週間におしなべて考えたケースとみれば、1170 時間を 52 週で除して 1 週間あたり 23 時間の授業時間外学習が求められていたことになる。よって全学平均が 6~9 時間半であったという事実は単位の実質化はまったくおぼつかない状況にあることになる。全学でこの水準を超えて授業時間外学習をおこなっているとした回答の割合はおよそ 9%であった。法制の帳面上の話ということで換言すれば、必要な授業時間外学習があきらかに未充足である状態で単位認定がなされていることになる。

図表 9-14 授業以外で勉強している時間(平均値)



もっともこれは本学固有の課題ではなく、総じて現在の日本の大学全体についての課題であることも確認しておく。全国調査の例では類似の設問はあるが、形式が異なっているため直接の比較ができない。しかし、参考までにあげておけば 2008 年にベネッセコーポレーションが全国大学生約 4000 名に実施した大学生の学習・生活実態調査では「授業の予復習や課題をやる時間」で週あたり 1 時間未満が 48.7%、0 時間という回答が 20.2%、「大学の授業以外の自主的な勉強」で 1 時間未満が 61.4%、0 時間が 31.7%という次第であった。本学の現状に求められている週あたり 23 時間の学習という基準でいえば、この調査の回答選択肢で最も長い「21 時間以上」への回答率は「授業の予復習や課題をやる時間」が 0.7%、「大学の授業以外の自主的な勉強」が 1.4%という具合になっている。この結果をみて唖然とすると同時にやや安堵するかもしれないので、もう 1 例あげておく。東京大学の学生生活委員会が 2007 年に実施した調査では同大全部生から約 1500 (男性の割合約 75%) のサンプルを得ている。その平均値をみると一日あたりの自宅・図書館での学習時間は 2.0 時間、大学以外の教育機関での学習時間は 2.1 時間となっている。前者をここでの設問に相当するとみれば、週あたり 14 時間で本学よりも長い。もし卒業要件単位の 124 をもとにしてみれば、1 年 52 週でみた場合、週あたりの必要授業時間外学習時間数は 19 時間だから、これもそれを満たしてはいないが接近はしていることになる。ただし、この設問は一日あたりの時間数を問うている。先に触れたようにこの点に留意が必要であろう。

本学の結果に戻り、学年間でみると、学年が進むほど授業時間外学習の時間数は明確に伸長していることがわかる。4 年生では初年次の倍以上の 14 時間になっている。このことから単位の実質化は相対的に単位取得数の多い初年次生についての課題とみてもよいかもしれない。

学部間平均値では、文教 9 時間 17 分、生活科学 9 時間であるのに対して理学部で 10 時間半とやや多くなっている。ただし、これは本調査での理学部回答者の学年構成比が 4 年生についてやや多くなっている (4 年生の回答者割合、文教 28%、理学 35%、生活科学 34%) ことも多少影響していると思われる。

4) 公務員試験や資格取得のための予備校に通っていますか。

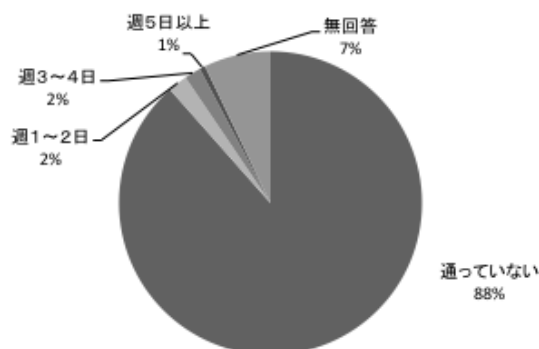
回答形式 選択 1. 通っていない 2. 週 1~2 日 3. 週 3~4 日 4. 週 5 日以上

この設問の結果は約 9 割が通っていないと回答、学年、学部のあいだに明白な差異は認められなかった。また、院生にも同じ設問があったが、通っていないとする回答が 88.3%でほとんど同じ結果となった。

前問でみたように、東京大学の学生生活委員会が 2007 年に実施した同大全部生に対する調査結果では、大学以外の教育機関での学習時間が 1 日あたり 2.1 時間となっている。その教育機関とはここでいうような予備校だけを指しているわけではないと思われるが、現実的にみてどのような機関を指し

ているのか、またその時間の長さについて簡単には了解できない結果に思われる。

図表 9-15 公務員試験や資格取得のための予備校に通っているか



3. メディア利用

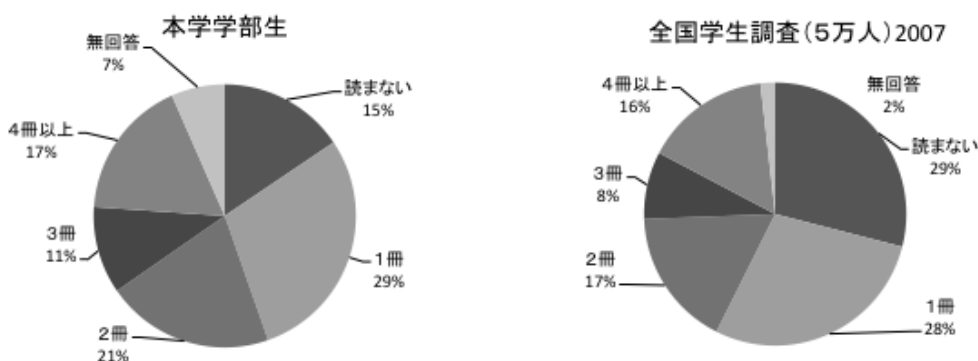
1) あなたは本(マンガ、雑誌を除く)を一ヶ月に何冊くらい読みますか。

回答形式 選択 読まない 1冊 2冊 3冊 4冊以上

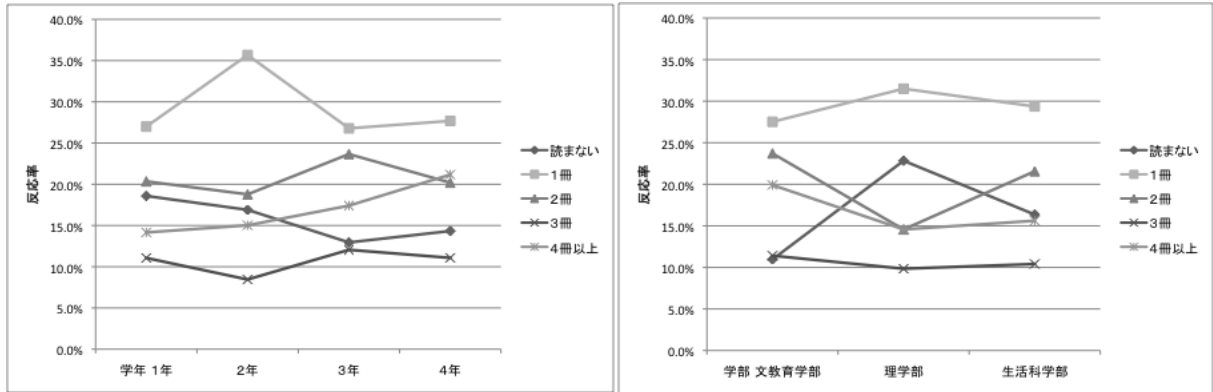
読書量である。一ヶ月の読書量は回答としては全学的には1冊という反応が最も多かった。これは学年、学部を問わず同様であった。院生にはこの設問はなかった。次に多かった回答は2冊、これが理学部の場合は「読まない」のほうが多かった。また、4学年では「4冊以上」が2位に伸びる。「4冊以上」読むという回答には学年が進むにつれて逓増傾向が認められる。逆に「読まない」学生は学年進行に伴い逓減する傾向が認められる。

東京大学大学経営・政策研究センターによる2007年に実施した全国127大学、約5万人学部学生に対する調査結果では、これと同等の設問がなされたが、その結果は「読まない」という回答において本学学生の相対比があきらかに低く、他項においてその分、すこしずつ高くなっていることがつかめる。ただし、1冊以上読んでいる状況の構成比は全国データとほとんど同様であり、本学学生の読書像は典型的な大学生のそれにほぼ沿っているといえそうである。

図表 9-16 一ヶ月の読書量(マンガ、雑誌を除く)



図表 9-17 一ヶ月の読書量(マンガ、雑誌を除く)(学年別、学部別)



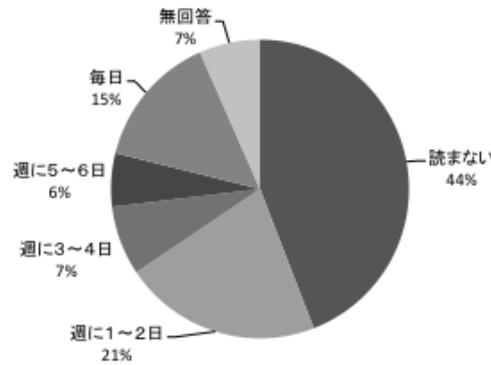
2)新聞(ネットは除く)を読みますか。

回答形式 選択 毎日 2. 週1~2日 3. 週3~4日 4. 週5~6日 5. 読まない

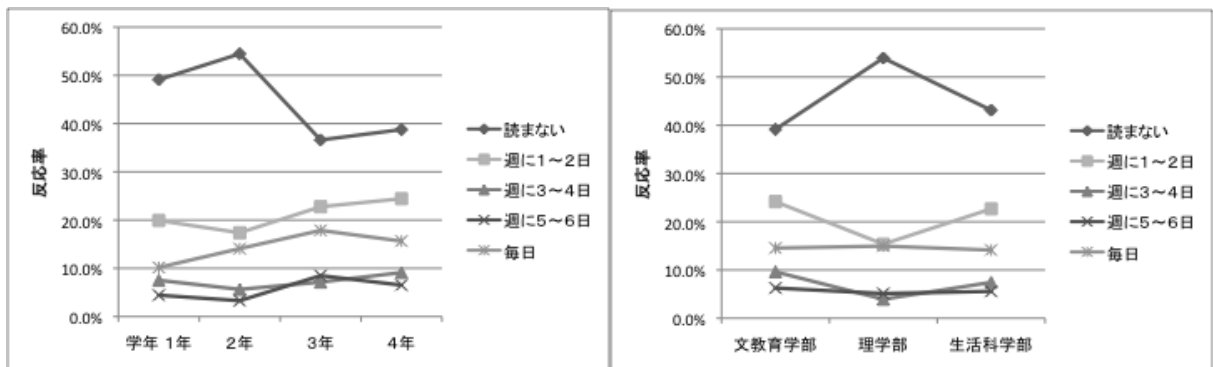
いまや新聞購読が「ネットを除く」という条件をつければ、「読まない」とする人が半数前後を占めることはそれほど驚くにあたらないだろう。「読まない」につづいて多かった回答が週に1~2日、つまり日刊であろう新聞が週間誌のような読み方になっているという事実も時代の変化を感じさせる。今後、新聞社によるネット配信が一層、本格化すればこの傾向はますます強まるであろう。

学年別にみると、さすがに社会への出口に近づく高学年で「読まない」層の割合は減り、毎日読む人がすこし増えることがわかる。だが、それでも「読まない」層の比率は一番多いことには変わりはない。

図表 9-18 新聞を読む日数(学部生)



図表 9-19 新聞を読む日数(学年別、学部別)

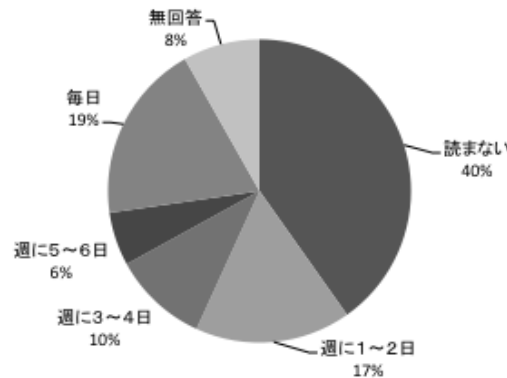


学部別でも理学部で「読まない」層が相対的に多くなっている傾向が認められる。ただし、全体の趨勢に変わりはない。

大学院生にも同じ質問をしているが、結果は毎日読む層がすこし多い傾向がみられる点以外、概ね学部生の結果と一致していた。

外部調査では東京大学の学生生活委員会が2007年に実施した学内調査で一日あたりに新聞・雑誌を読む時間を尋ねている。その結果は30分であった。時間数を尋ねていること、雑誌が含まれていること、ネットの除外が明記されていないといった点で当設問とは性質を異にしている。

図表 9-20 新聞を読む日数(大学院生)



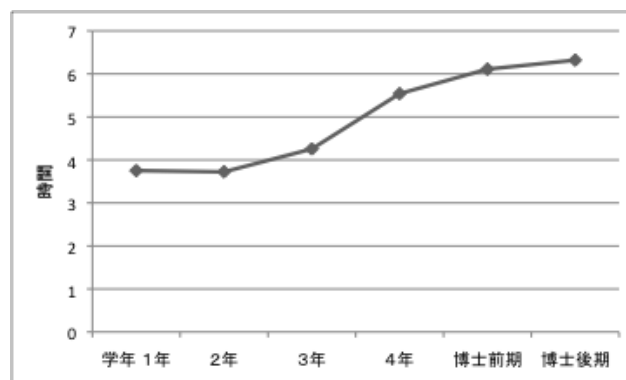
3)一日のうちに携帯電話、コンピュータ、テレビなど、画面を見ている総時間は平均何時間くらいですか。

回答形式 自由記述

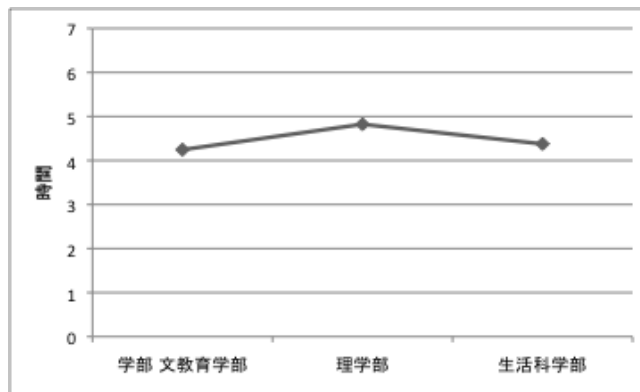
無回答および回答が24時間以上になっていてありえない回答の3件(20時間という回答もあり、現実的ではないと考えられたが、それが2件あったこともあり有効とした)を除いて有効回答数は885、平均値4時間24分、最小値30分、最大値20時間、標準偏差2時間41分、中央値4時間であった。標準偏差内の1時間45分~7時間6分のなかに全体のサンプルの83%が入る分布となっている。これらから要約すれば、4時間から4時間半を平均としてそれよりも前後4時間の範囲で少ない時間、多い時間ともにほぼ等分の分布で広がっており、個人差は比較的大きいといえよう。

この設問に対する回答の学年間の差異は明確である。学年が進行するとともに、とくに高学年次において画面を見ている時間が増していることが明白で、その傾向は大学院においてもなお継続している。結果的に博士後期生の平均値(6時間19分)は学部初年次生(3時間45分)の平均値よりもおよそ2時間半長く画面を見ていることがわかった。

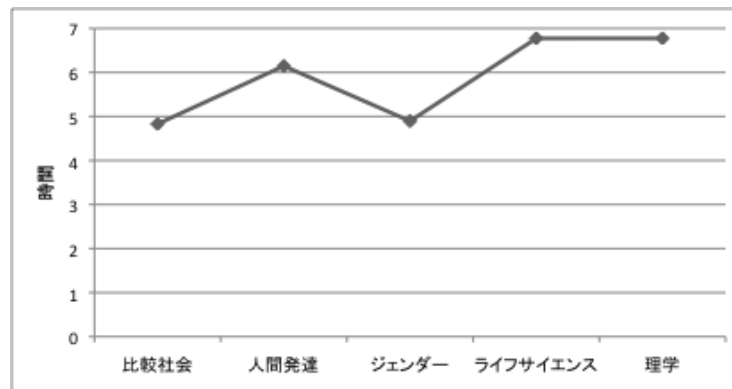
図表 9-21 画面を見ている時間(1日あたり)平均値



図表 9-22 画面を見ている時間(1日あたり)平均値(学部別)



図表 9-23 画面を見ている時間(1日あたり)平均値(専攻別)



学部別では理学部で他学部よりやや長くなっている傾向がみられるが顕著ではない。大学院になると全体に増加するが、理系において顕著に増大しており、文系平均よりも2時間ほど長く画面をみている状況がつかめる。

この設問ではあとの設問との関係でコンピュータからテレビ、携帯電話までともかく「画面」をみている時間という独特の質問をした。したがって、学外の調査ではこれと内容が一致する設問はないが、似たものとしてベネッセコーポレーションによる全国大学生約4000名に実施した大学生の学習・生活実態調査(2008)があり、テレビやDVDなどの視聴時間を尋ねている。8つの時間区分を設けた選択肢が多かった順に3つをあげれば、3~5時間が22.3%、1~2時間が18.6%、6~11時間が16.6%、これで全体の57.5%になる。最も多かった区分に本学の画面をみつめている平均時間が重なるということは本学学生のテレビやDVD視聴時間が全国的な大学生平均よりも少ないことを示しているようである。

また、東京大学の学生生活委員会学内調査(2007)ではテレビ・ラジオの平均視聴時間が1時間18分、CD・ビデオ・映画が56分、インターネットやゲームが1時間29分、電話(携帯メールを含む)が31分となっている。これらの合計値は4時間14分となる。ラジオ、CD、電話(会話)など画面がかかわらないものもあるが、昨今これらに費やす時間が減っていることからすると、この平均値は当設問に対する本学の結果にほぼ合致していることがわかる。

4) そのうちインターネットにつながっている時間(メールを読み書きしている時間も含まれます)の割合は、およそ何パーセントくらいを占めますか。

回答形式 自由記述

平均値 60.4%、中央値 70.0%、最大値 100.0%、最小値 0.0%、標準偏差 31.0%であった。興味深いことに 100%という回答が有効回答のおよそ 9%を占めていた。その時間数はさまざまであろうが、いまや画面をみつめている時間の長さはもちろん、その画面は常にインターネットにつながっているという回答が 1 割に達しようとしている。これをほとんど常にインターネットにつながっている画面という表現にして、それをここでの数値 80%以上ということで解釈するなら、その割合は全体のおよそ 4 割を占めることになる。反対に画面を見ている時間のうちネットにつながっている時間はないとした回答は 1%にも満たなかった。あまりネットに接していないという表現をここでの数値 20%以下とすれば、全体のなかでの割合は 1 割 5 分程度ということになる。

以上から学部生の平均像を示すなら、一日のうちに画面を見つめている時間はおよそ 4 時間半、そのうちの 60%、2 時間 42 分はインターネットにつながっているというイメージになる。ただし、上述のごとく個人差は大きく、この平均像を大勢のものとするのはできない。

大学院生の場合は先に見たように、学部生よりも画面を見ている時間が明確に長くなっているのだが、興味深いことにそのうちインターネットにつながっている時間の「割合」については院生全体の平均値で 63.5%、中央値 70.0%、最大値 100.0%、最小値 5.0%であり、これらの値は学部生とそれほど変わらなかった。上と同様、ここから院生の平均像を示すなら、一日のうちに画面を見つめている時間はおよそ 6 時間 10 分、そのうちの 64%、約 4 時間はインターネットにつながっているというイメージになる。確かにネットにつながっている時間数は学部生よりもずっと長くなっているのだが、それは画面をみている総量が増しているからであり、ネットとのつながりの相対的な割合はそれほど増加していない。つまり、ネット以外の画面をみている時間でいえば、学部生は平均 1 時間 48 分であったのに対して、院生は 2 時間 13 分ということになる。もっともこれはインターネットに接続していないコンピュータの画面や実験機器の画面をみているといったことが加味されているのかもしれない。

5) Q43-a の時間のうちテレビを視聴している時間はおよそ何時間くらいですか。

回答形式 自由記述

現代の若者はテレビを見なくなったといわれている。NHK が実施している国民生活調査ではここ 10 年で高齢者層以外の世代ではテレビ視聴時間が減少している。2010 年の調査では 20 歳代女性（サンプル数約 490）の平日のテレビ視聴平均時間は 2 時間 33 分、10 歳代女性（サンプル数約 570）は 2 時間 1 分でこれらは他の世代よりも短い視聴時間となっている（それぞれ男性はさらに短く 2 時間を切っている）。

一方、本学の学部生の一泊あたりのテレビ平均視聴時間は 1 時間 16 分、中央値 1 時間、標準偏差 1 時間 12 分であるから、個人差が大きいようだが、一般的な同世代女性よりもテレビ視聴時間はあきらかに短いようである。平均像としては画面を見ている時間のおよそ 29%がテレビ画面になっているという状況である。一昔前は画面といえばテレビでしかなかっただろうが、いまやそこへの振り向き度合いは 1/3 になっている。

院生の結果は、1 時間 18 分、中央値 60 分、標準偏差 1 時間 5 分であった。テレビ視聴時間については学部生と同様である。やはり前の設問でインターネットに接続している時間以外に画面をみている時間が学部生よりやや長くなっているのは、ネット接続していないコンピュータ画面ということのようである。もっともネットにつながっている時間の割合、という主観的な判断であるから、そこにあらわれる数値の差異としての有意性は相当程度に大きく見積もる必要があることはいうまでもない。

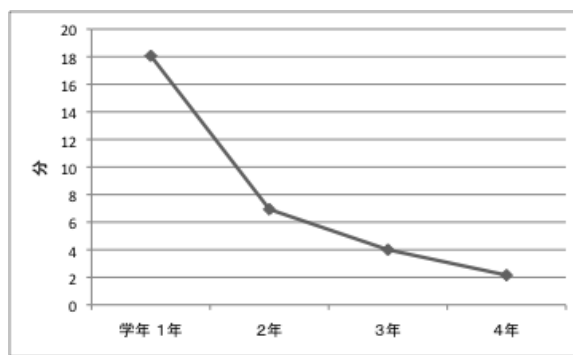
学年別では 1~3 年生までが平均 1 時間 10 分ほどだが、4 年生では平均 1 時間 30 分ほどに増加している。中央値はどの学年も 1 時間であるから、4 年生において長い方向にやや極端値があると察せられる。学部別では文教学部生が生活科学部生よりも 20 分ほど長めで理学部生はその中間という平均値になっている。この場合も中央値はすべて 1 時間であるから、平均値にあらわれた差異を学部の性質の相違としてとらえるにはあたらないだろう。

6) Q43-a の時間のうち学修支援システム(Moodle、Plone など)を使っている時間はおよそ何時間くらいですか。

回答形式 自由記述

使用時間0分を含む回答者内で、平均値7分、中央値0分、最大値5時間、最小値0時間であった。中央値0ということは0分という回答者が大勢であることによる。したがって、0分回答を除き、使用者だけをみるとその数は144件、有効回答数に占める割合は17%であった。その使用者内での平均値は43分、中央値30分、最大値5時間、最小値1.2分であった。この学修支援システムが本格稼働しはじめたのはMoodleが昨年度、Ploneが今年度であるから、使用者が2割弱という状況は穏当なところであろう。学年別の使用時間平均値には学年が若いほど使用時間が長くなっており、語学などコア科目を中心にこのシステムが使われ出している現況があらわれている。

図表 9-24 学年別学修支援システム利用時間(分)平均値



一方、院生の使用者をみると、有効回答353件中26件で7%であった。これは少ないというよりむしろ院生にも利用者がある、つまりこのシステムを用いている授業があるという事実の確認になった。院生使用者の平均使用時間は1時間24分、中央値45分、最大値9時間、最小値5分であった。

7) インターネットを介して利用しているもので、今やあなたの生活にとって不可欠になっているものすべてを選択してください。

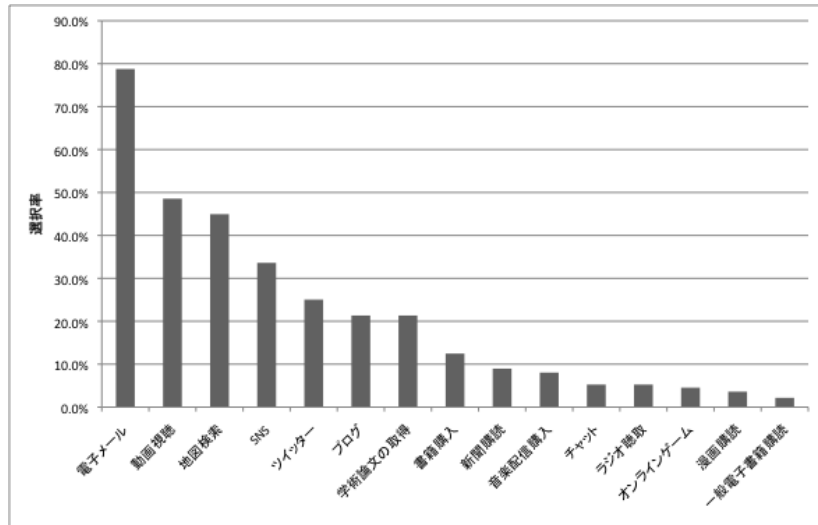
回答形式 複数選択

- | | | | |
|------------|--------------------------|--------------|----------|
| 1. チャット | 2. 動画視聴 (YouTube、ニコニコなど) | 3. 電子メール | 4. Blog |
| 5. SNS | 6. ツイッター | 7. オンラインゲーム | 8. 新聞購読 |
| 9. 学術論文の取得 | 10. 漫画購読 | 11. 一般電子書籍購読 | 12. 書籍購入 |
| 13. 音楽配信購入 | 14. ラジオ聴取 | 15. 地図検索 | |

学部生について選択率の高かった項目順に並べ直した結果はグラフのとおりであった。電子メールの利用が約8割、約半数が利用している項目が動画視聴と地図検索。3割内外が利用しているのはSNSとツイッターであることがわかった。学術的な利用というより、コミュニケーションツールとしての利用が主体をなしている様子が見られる。

学年の違いにより体系的に使用率の変化が認められたものを取りあげると、電子メール、ブログ、ツイッター、新聞購読、書籍購入、地図検索、学術論文取得でこれらは学年が進むほど使用率が増大し、率にして2倍程度伸びている場合がある。とくに学術論文取得は初年次使用率は5.8%であるが、2年次10.3%、3年次21.0%、4年次40.7%と倍々に増加している。

図表 9-25 生活にとって不可欠なもの(学部生)



大学院生では電子メールの利用率が学部生より一層高まり、つづいて学術論文取得と地図検索が半数を超えた。学部生と比較すると動画視聴、SNS、ツイッターの利用率が減少し、書籍購入と新聞購読が増大している。コミュニケーション用途に替わり学術研究面での利用が増している様子が見られた。

なお、調査では選択項目に「チャット」が重複して記載する不備があったが、ここでは同項目について選択数の少なかった回答のほうを除外した。

図表 9-26 生活にとって不可欠なもの(大学院生)

